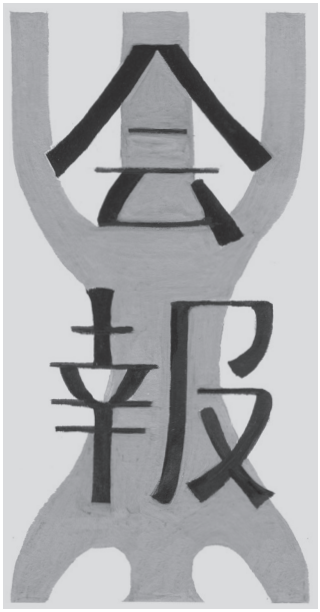
# 平成28年度　第60回
# 全国教員夏季研修会

**期日**　平成28年8月8日（月）～10日（水）

**会場**　新横浜プリンスホテル　他




日本私立小学校連合会
〒102－0073
東京都千代田区九段北4－2－25
私学会館別館6階
電話　03（3261）2934

## 全国教員夏季研修会を終えて

関東地区私立小学校連合会
会長　斎藤　滋

第六十回全国教員夏季研修会が、八月八日から十日までの三日間、新横浜プリンスホテル、新横浜グレイスホテルをメイン会場とし、近隣校からも会場提供をいただきながら行われました。

今回の研修会は、より多くの先生方にご参加いただきたいという配慮から、これまで八月の中旬以降に行っていた日程を変更し、八月初旬に行うことになっていました。日程が大きく変更になったことで、加盟校、そしてご参加いただいた先生方にはご負担をおかけしてしまったのではないかと思います。参加人数は三年前に関東地区で担当させていただいたときよりも四十名ほどの減となったことは残念に思いました。

さて、研修会の準備は二月の担当地区運営委員会から始まりました。遠方からの参加者の負担を軽減し、その経費を研修会への運営委員の参加に役立てようと考えた上で実

施した会議でした。この会議をスタートとして、八月の研修会に向けて、各部会の運営委員を中心に準備が始まりました。

「二〇一〇年代の教育宣言」の中には「心の時代」という表現が見られます。また、グローバル化と言われることの多い昨今ですが、世界の人々がお互いの「心」を理解し合えることが今求められていると考えます。インターネットや通信技術の発展によって、時間的には世界は一つになってきたと言えるかもしれませんが、生活習慣、考え方などが異なる人々がどのようにお互いを理解し合っていくかはこれからの大きな課題でしょう。このようなことからも、ゆたかな心を育む教育が求められているのではないでしょうか。私学には、心の教育を大切にした建学の精神があります。教育に従事する熱心な先生方がいます。そして、教育に高い関心を持つ保護者と純粋な心を持つ子どもたちがいます。このように理想的な条件が整っているのが私学であると言えます。私たち教員集団は、今自分が置かれた教育現場で個の力を高め、集団の力を強くし、自分たちの理想とする教育活動を実践して行くことが求められています。

さて、この研修会の準備をしてくる中で、十四の部会の実施回数に関心を持ちました。日私小連の歴史は、「日本私立小学校連合会（結成五十年のあゆみ）」で学ぶことができました。そこには研修会の歴史も記載されており、今回五十五回の最多回数である理科部会をはじめそれぞれの部会のあゆみを知ることができました。今回五回目を迎えた学校劇部会はまさに今作り始めるご苦労をされているのだということが伝わってきます。次回西日本地区で行われる研修会がすばらしいものとなるように皆さんで応援していきましょう。

この夏、研修会を通してたくさんの人たちとの出会いがありました。これは私のたからものです。共に準備をしてくることができた関東地区の役員の先生方はもちろん、日私小連役員・事務局・部会担当理事の皆さんに感謝し、私の振り返りといたします。ありがとうございました。

## 国語部会

### 国語の基本に立ち返った三日間

森　幸彦（甲南）

今年度の研究主題も、「子どもたちと共につくる国語授業の創造」。言葉を通して思いを伝え合うことの楽しさと豊かさを感じながら、他者理解と自己実現を図り、確かな国語力の育成を目指すことを探究した。

初日は、カリタス小学校のご協力により、程島健介先生による研究授業を行うことができた。説明文教材を学校独自に改変された「緑のダム」を教材にした授業だった。授業後の研究会では、参加者が六人グループに分かれて授業の良かったところや疑問に感じたところ、改善策などを話し合った。話し合った内容を模造紙に付箋を貼ることで可視化し、参加者が見て回る時間があったので、様々な先生方の意見を知ることができた。

二日目の午前中は、低・中・高学年に分かれて教材研究ワークショップを行った。コーディネーターとして、低学年は西勝巳先生（関西大学）、中学年は澄井俊哉先生（相模女子）、高学年は家城直子先生（国立音大附

属）をお招きした。ベテランの先生方の教材に対する見方や考え方を教えていただいたり、子どもを意識してどのように授業を組み立てていくかなどを学んだりした。部会によっては、グループで教材研究をしたり、各自で教材を読み込んだりと、有意義な時間を過ごすことができた。

午後は、研究発表。「読む」分科会では、片岡史奈先生（追手門）から、音読に親しみを持ち、豊かな音声表現ができるクラスを目指した様々な取り組みを紹介してくださるご提案。新出美紀先生（目黒星美）からは、スイミーの授業を通して、子どもたちがともに学び合い、主体的に学習課題を追求するにはどうすればいいかというご提案があった。「書く」分科会では、遠藤綾子先生（横浜雙葉）から、図書と国語の連携をはかりながら調べ学習の基礎作りを目標に三年生「本で調べて報告しよう」を実際に活動しながら報告書を書いてみようというご提案。堀口史哲先生（立教女学院）からは、「脱、その場しのぎの言語活動」ということで、書く内容と書く媒体の関係を学習内容によって判断したり、説明文の学習活動を「絞る」「限定する」ことで、書く活動を試みるというご提案があった。「話す聞く」分科会では遊佐恵先生（白百合）から、一年生「大きなかぶ」の授業に、音読活動や劇化活動を取り入れ、「読みが深まる」とはどういうことなのかを細かい授業記録から考察するご提案。鈴木武司先生（関西学院）からは、「話すこと・聞くこと」と音読指導の関連はどのようなものなのか、実際にご自分のクラスの子どもたちの音読の様子を見せていただきながらのご提案だった。どの報告も先生方の情熱と工夫に満ちた実践であった。

最終日は、筑波大学附属小学校の青山由紀先生のお話を伺った。主に一年生と三年生の教材を使ったお話だったが、先生が実際にどのような授業をされたかを細かくお聞きするだけで、先生がどのように教材を分析され、分析された内容をどのように授業に組み立てたのかが非常によく分かった。目の前の子どもたちを頭に描きながら教材研究をすることの大切さを、改めて実感させられる講演会だった。

## 社会科部会

### 二十一世紀を生き抜く子どもたちへの社会科教育

東原　秀郎（国立学園）

今年度も全国からお集まりいただいた先生方と活発に意見が交わされ、充実した研修会を実施することができました。

一日目は、九州地区の道下勝先生（聖マリア学院）より、「自分の思考を分かりやすく伝える子どもを目指して～四年生『長崎県の産業の様子を調べよう』～」の提案発表がありました。学習の過程で調べたことを「チャート」にまとめ、自分の思考を整理し、それを用いることで、相手にわかりやすく伝えることができるのではないかと考え、実践されました。「チャートは、自分の頭の中を整理するには有効だが、説明の手段とするには理解されにくい部分もある」「言葉にまとめること、表現することも大切だ」という意見が出されました。続いて、関東地区の水野佳羊子先生（捜真）より、「出会いの中で育まれる平和への思い～六年生『一年間の平和学習の試み』～」の提案発表がありました。戦争経験者が少なくなる中、いかに子どもたちに平和の大切さを伝えていくかというテーマに向かい、ＮＨＫの映像やゲストティーチャーの話、戦争遺跡の見学などを活用し、いろいろな人との出会いを学習の過程に取り入れ、運動会での表現活動や下級生を招いてのポスターセッションなどの表現活動にも取り組み、「今度は自分が伝えていかないといけない」と子どもたちの心の成長が見られました。新たな問題も世界のあちらこちらで起きており、学習させるべき課題は多々あり、さらなる研究が期待されます。

二日目の午前は、横須賀開国史研究会会長の山本詔一氏をお招きし、「明治期以降の横須賀市の発展と戦争のかかわり」というテーマで講演していただきました。ペリーの来航後、造船所が建設されるに至った経緯や、造船所建設中のエピソード等を詳しくお話しいただきました。

午後は、「横須賀の戦争遺跡をめぐる」をテーマに、三つのコースに

船員の碑等を見学しました。

三日目は、西日本地区の山川丈二先生（奈良学園）より、「本物を学び、本物を知る～地域の伝統を生かした授業づくり～」の提案発表がありました。二年生の時にした紙すき体験を生かし、四年生の地域学習で本物の手漉き和紙職人に出会い、話を伺うことを通して、子どもたちの伝統文化に対する考えが変容する様子を伝えていただきました。続いて東京地区の長代大先生（学習院）より「子どもが『実感』『共感』をもって社会的事象に関わろうとする社会科授業～フィールドワークを活かした授業づくり・八丈島フルーツレモンの教材化を通して～」の提案発表がありました。教師のフィールドワークを活かした教材開発と授業について、価値や可能性、留意点等について意見が交わされました。

これからも、私学社会科の研究を深めていきましょう。

分かれてフィールドワークが行われました。Aコースは、旧海軍が建設した逸見浄水場見学と軍港を巡り、日米間の友好関係や境界線などが感じられました。Bコースは、砲台跡や弾薬庫等の遺跡が残る猿島と日本海海戦で連合艦隊旗艦として活躍した三笠を見学し、保存会の方の強い思いを感じました。Cコースは、海風公園内第三海保大型兵舎を見学した後、観音崎公園内の砲台跡や戦没

## 算数部会

### 学び合う算数授業を目指して

福中　千鶴（百合学院）

研修会では毎回「算研ニュース」を配布し各地区の算数研究の様子をお知らせしています。今年は、昨年五十周年を迎えたことを記念して約二十年分の算研ニュースを合本にしました。今回は第三号となりますが、これまでの算数部の研究の歴史がよく分かるものとなっています。

「学び合う算数授業を目指して」というテーマのもと、多くの先生方が参加してくださいました。今年は、若い先生方に日頃の研究や実践について発表していただこうと研究発表の機会を増やしました。

第一日目は、カリタス小学校を会場に長島寛和先生（カリタス）の授業「速さ」（六年）が行われました。子ども達が夢中になっている大縄跳びの映像を見ることによって「結構速い」「すごく速い」ということをより正確に表現するにはどうしたらよいかと話し合いが進められました。授業後の協議会はカリタス小学校が取り入れられている小グループによるワークショップを行いました。グループごとに意見を交換しまさしく学び合う機会となりました。「速さ」は比較することによってより正確に表現しようと考えるのではないかという意見が出されていました。時間の関係

で全体会を行うことができなかったことが大変残念でしたが、各グループのまとめを掲示して共有することができました。また二日目のグループ別懇談会では多くの議論がかわされました。

第二日目は、研究発表・ワークショップ・テーマ別グループ別懇談会が行われました。

研究発表は、低学年部会では吉川貴絵先生（立教女学院）、森脇菜月先生（奈良学園）、中学年部会では渡辺信行先生（同志社）、森勇介先生（帝京大学）、高学年部会では三島麗雄先生（早稲田実業学校）、守屋悠司先生（清泉）から提案がありました。日頃の実践を発表していただく場となりました。

ワークショップでは、井本達也先生（追手門学院）の「万年カレンダーを作ろう」、山本大貴先生（暁星）の「『できた』理由だけでなく、『できない』理由も面白い!?」、川﨑恵先生（清泉）の「円を利用してのいろいろな形作り」という提案があり、参加の先生方は夢中で取り組んでおられました。

テーマ別グループ別懇談会では、小グループに分かれて情報交換を行いました。

第三日目は、清水美憲先生（筑波大学教授）に「『算数科で育むべき資質・能力は何か』―教科の特質からみた『学び合う算数』の意義―」をご講演いただきました。「算数は言語教科である」というお考えを伺い感銘を受けました。二〇二〇年に改訂される学習指導要領のポイントなど分かりやすく教えていただき、清水先生のお話に引き込まれた有意義な時間となりました

講演、公開授業、研究発表、ワークショップ、グループ別懇談会と、充実した三日間となりました。ご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 理科部会

### おもしろい理科の授業を創る

多賀　桃子（カリタス）

**【第一日目】全体会**

「子どもの学習履歴を基にした授業改善とその方法―ＯＰＰＡを中心にして―」というテーマで堀　哲夫先生（山梨大学　理事・副学長）に講演していただきました。

一枚の紙に学習者の学びはじめから学習を通してどのように変わったのか、その変容全体を自己評価しおさめ、それを教師もみとることができるものがＯＰＰシートです。

ＯＰＰシートを用いると、学習者の考え方がみえてきます。みえてきたものと教師の考え方・教育観を見比べ、それらの間に溝がある時初めて、子どもの論理を重視しそれに従って授業を組み立てていくことが正しい選択であると気づき、教師の子どものみとり方（教育観）をも変えるチャンスなのです。

ＯＰＰシートには、変容過程をも自己評価するために可視化＋外化するので学習者の中に残っているものが素直に出てきます。その内容は教師が想定するものを超えたものを書いてくることもあり、教師だけでなく学習者がＯＰＰシートを見て自己評価をすることで『勉強するのって大事だね。いいものだね。』など手応えを感じて、学ぶ意欲が湧いてくることにつながります。

このためには教師は学習者が様々に考えられるような問いを設定し、短く次にグレードアップするようなコメントをかえすことがポイントになります。そのうち学習者がコメントに答えるようになることもあります。この取り組みは一人ひとりに向き合うことにつながり、授業でカバーできない部分もフォローすることも可

能です。理科だけでなく『教育』をもう一度考え直せるなど大きな可能性を秘めたＯＰＰＡ(One Page Portfolio Assessment)評価方法についてご教授いただきました。

**【第二日目】　分科会**

二十四人の先生方による授業実践の発表がありました。理科という教科で扱う領域は広いのですが、どの提案授業もそれぞれの先生方の専門性が発揮されていて学ぶことが多かったです。来学期以降に活かすことができる実践的な内容で有意義な研修となりました。

**【第三日目】全体会**

「動物園を支えるサイエンス」というテーマで　村田浩一先生（日本大学生物資源科学部教授／よこはま動物園ズーラシア園長）に講演していただきました。

動物園には、種の保全、教育・環境教育、調査・研究、レクリエーションの四つの役割があります。また動物園は地域振興、防災公園の役割や世界的に見ると、生息域内外保全や動物福祉といった役割も果たしています。

横浜市における動物園の役割は種の保全と動物園科学の連携があります。ズーラシアにおける具体的な取り組みとは、繁殖センターにおいて色々な環境を再現し、適性に合わせた繁殖や生殖細胞の冷凍保存や希少種繁殖もおこなっています。

来園を機に生物の多様性を知り、命の大切さを知って欲しいと考え、ヒトも動物の一種であり、自然と自分とのつながりを意識させるためにできるだけ早く子どもが自然の世界と結びつく機会が必要です。自分が自然の中にいる感覚（「センス・オブ・ワンダー」）に気づき、このような動物園を目指しているのがズーラシアで、言葉ではなく、体感してほしいと願っているとのことでした。

## 音楽部会

### ひとりひとりの子どもが輝く実践を目指して

城　恵美子（カリタス）

音楽部会は「ひとりひとりの子どもが輝く実践を目指して」が研究主題である。

初日と二日目後半の講師は筑波大学附属小学校の平野次郎先生。テーマは「教科書の半歩先を行く音楽づくりの授業アイディア」である。平野先生は、音楽づくりにおいて、楽しいだけじゃ学びにならないが、楽しいからじゃないと始まらないという信念を持っておられる。音楽づくりでの「楽しい」は、音楽的な要素を考えながら表現することや音や音楽としてつくり上げていく過程にある。音や友だちとのコミュニケーションの視点も小学校教育では欠かせない。研修では、常時活動で簡単にできる音楽遊びから身近な楽器を生かした即興演奏、グループでのいろいろな活動を行うことができた。また、鈴木楽器の協力により音楽づくりに適したたくさんの楽器に触れたり演奏したりすることで、これからの授業に大いに役立つ情報を数多く得ることができた。拍を感じている子どもやテンポを取っている子どもを言葉にして褒めることで、大切なことを意識させたり、その活動の意味を子どもたちに考えさせたりすることで、感覚だけに頼らず理論的に音楽づくりをしていくことを学んでいく。また、笑顔で仲間と関わっている子や前向きに関わっている子を褒めるなど音楽を通して仲間と関わることを大事にしているというお話も印象的だった。また、作った音楽を楽

しく演奏するための伴奏や、ＩＣＴ活用法、音楽づくりの評価についてのお話も伺うことができ大変勉強になった。

二日目前半は「子どもが輝く歌唱授業を求めて」というテーマで、桐蔭学園の岩井智宏先生が提案授業を行った。音楽の楽しさを共有する岩井先生の実践をワークショップで体験していった。歌唱指導に向けた導入の工夫では、まずはほめてあげるという姿勢から、随所に岩井先生の子どもたちとつながろう、やる気を出させてあげようという思いが伝わってくる。子どもたちは直ぐに表情が明るくなり、声が明らかに変化するのがわかる。ちょっとした仕草でも、子どもたちの反応を感じ取り評価するという。授業研究のＶＴＲを見ての感想や質疑応答を行った。授業の中で否定的な言葉や注意する言葉が出てこない。一人ひとりの子どもたちをしっかり看取り、その個々に合った声かけや関わりをしていることがすばらしい。なんでも吸収して自分のものにしようという岩井先生の学びの姿を私たちもぜひ見習いたいと思った。

三日目は鍵盤打楽器メーカー斎藤楽器の協力による鍵盤打楽器講習会。木琴の使い方やメンテナンス、演奏法を紹介していただいた。初めに学校現場での経験豊かな講師、村本寛太郎先生の素敵な演奏あり、目から鱗の知識あり、そして創作活動だけでなく観賞や表現の授業に役立つ音楽づくりのワークショップあり。音楽鑑賞教室にも相談にのってくれるそうなので、またぜひそれぞれの学校で役立てていってもらえればと思う。

## 図工部会

### 未来につながる造形との出会い

森　玄太（相模女子大）

図工部会では、「未来につながる造形との出会い」を研究主題とし、各地区の先生による部会発表、多くの学校が参加したギャラリーでの展示、講師をお招きしての講演が開催された。

実践発表1では、ご自身も日本画を選考されていた相原史隆先生（昭和女子大学附属昭和）より、「日本画に触れる」と題し、実習を交えた提案発表をしていただいた。

実践発表2では、瓜阪萌子（近畿大学附属）先生より自分のイメージをかたちにするための大切な要素である『色』と『色の組み合わせ』について考えることに焦点を当てた、学習と取り組みについて、ワークショップも交えつつ、ご紹介いただいた。

実践発表3では、神山素来（桐蔭学園）先生より、単なる作陶体験だけで終わることのない、子どもたちの人生に影響を与えるような授業をと考え、作る喜びと共に常生活の中にある陶器、さらに「食文化」や「華道」などの分野にも関心が広がるような授業展開を目指されているという、陶芸の実践発表をしていただいた。

今回のフィールドワークは、研修の一環として、横浜駅近くにあるギャラリーFEI ART MUSEUM YOKOHAMAにて行われる企画展「美術がくれるもの」に参加した。この展示は、日頃美術教育に従事している教員が、美術の必要性、日頃の取り組みなどを考察し、自身の作品と共に展示する企画展。日本私立小学校連合会図工部会では児童の作品を一般公開すると同時に、教員個々の専門的視野を広げるために、図工を指導している一部教員の作品

も展示を行った。

日本私立小学校連合会図工部会からは、聖ヨゼフ学園小学校・聖セシリア小学校・横浜雙葉小学校・精華小学校・桐蔭学園小学部・横須賀学院小学校・湘南学園小学校・横浜三育小学校・国府台女子学院小学校・ぐんま国際アカデミー・森村学園初等部の十一校の小学校が参加しました。日本私立小学校連合会の他にも美術教育の現場で指導している数多くの作家・団体の展示も行われた。

日私小連全国教員夏季研修会二日目である八月九日（火）にFEI ART MUSEUM YOKOHAMAにて美術マーケットを行い、児童の作品を鑑賞し、日々の研究内容について意見交換できる場を設け、各校の教員が熱意を持って単元・作品の紹介をし、図工という教科についての多様な考えを共有することができた。質疑応答の場面ではグループ作品の制作の仕方、持ち帰らせ方など図工の教員ならではの悩みに答える場面も見られた。

研修最終日は、研究者で映像作家、多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師でもある菅俊一氏に「見えないつながりを発見する」というテーマで、これまでの表現事例を取り上げつつ、仮説とその検証により、新しい表現を生み出す方法論の解説をしていただいた。

三日間を通し、日々の実践に加え、新たなものの捉え方や見方を学んだ研修になった。

# 保健体育部会

## 保健体育部会研修会報告

綾田　満成（ノートルダム学院）

今年度の研修会は新横浜プリンスホテルと森村学園初等部を会場に行われた。

第一日目は、体育部会、保健部会合同で松本恵氏（日本大学文理学部体育学科准教授）の講演「小学生の水分補給の大切さと朝食の大切さ」を受けた。日常の学校生活において熱中症などにならないためには水分補給だけでなく、栄養バランスのとれた朝食をしっかりと取る事の大切さを、再確認した。

第二日目は、体育部会は、会場を森村学園初等部に移し実践発表として、自由学園初等部森井宏之先の「デンマーク・オレロップ体育アカデミーの体操エリートチームとの合同授業と発表」、甲南小学校の木村壮宏先生の「ソフトバレーボール」の二つを受けた。午後は元オリンピック選手で現在も四〇〇メートルの日本記録保持者の東海大学体育学部競技スポーツ学科教授の高野進氏に「かけっこクリニック&指導者研修」と題して、講演並びに実技研修を受けた。走るとはどういう事かから始まり、速く走るためのノウハウを分かり易く楽しく指導していただいた。

保健部会は、午前は、順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授の桐野衛二氏の講演「メンタルクリニック外来から見た発達障害」を受け、様々な発達障害について、理解を深めた。午後は、特定非営利活動法人ドラマケーション普及センター理事長、三嶋浩二氏の講演・実技研修「コミュニケーション能力向上を目指して」を受けた。コミュニケーションはいきなりとれるようになるわけではなく、また、日々使っていても正しく使えているのかがわからなくなるものである。コミュニケーションを使える人が身近にいることや、コミュニケーションを確認する機会を定期的に作り保健

室や学校全体の運営に活用していくことが重要であると感じた。

第三日目の体育部会は、新横浜プリンスホテルに会場を戻し、湘南白百合学園の山口祥治先生、関水日実子先生、伊東英奈先生の三人から、「保健について」の実践報告をしていただいた。本来は三年生からの保健を一年生から行い、計画的、系統的に行われている保健指導について詳しくお話しいただいた。

保健部会では、ワークショップとして、「養護教諭の資質向上に向けてのワールドカフェ」を行った。なるべく色々な先生方と接して話せるようにと、一テーマ約十二分という間隔だったが、とても短く感じられ、司会者の「時間ですので、そろそろ移動してください」という掛け声にも後ろ髪を引かれる様にしての移動となった。たくさんの意見や情報が交換され、非常に有意義な時間を共有することができた。

保健部会、体育部会共に三日間、実のある有意義な研修をすることができた。この研修をこれからの実践に活かしていけるように頑張りましょうと、皆で決意し会場を後にした。

# 学級経営部会

## つなげるつながる学級経営

岸浪　裕史（湘南白百合学園）

一日目は、大阪教育大学大学院連合教職実践研究科教授の家近早苗先生をお招きし、「学級経営に活かすカウンセリング」についてのお話を伺いました。まず、学校心理学の知識を生かして、教育実践の中で児童生徒に援助をしていくための方法を教えて頂きました。次に、アセスメントとは、情報を収集、分析、意味づけをして統合し、方針を決定する意味があることを伺いました。担任にできるアセスメントには、クラス、作品、遊戯の観察、本人との面談、心理検査、保護者との面談、記録書類の検討等が挙げられます。また、発達障害の傾向がある子どものアセスメントとしては、行動や気持ちを理解したり、子どもが言語の意味をよく分かっていない場合もあるので、分かりやすい言葉に置き換えて伝えてあげたりするとよいそうです。最後に、児童生徒理解に活かすカウンセリング（面談）のポイントについても伺いました。面談でのコミュニケーションには言語によるものとそうでないものを意識する必要があるということです。非言語的なコミュニケーションには、時間的行動（遅れて来る・沈黙等）、空間的行動（座る位置・物を置く位置等）、身体的行動（視線をそらす等）があることを理解し、言語的なコミュニケーションには、開かれた質問（Ｗｈｙ・ＨＯｗ）を投げかけることを意識して行うことで、子どもの気持ちを理解しやすくなるということです。

二日目の午前中は、上越教育大学教職大学院教授の赤坂真二先生をお招きし、「アドラー心理学に基づく学級経営」について、お話を伺いました。教師の指導力とは、強制力のことではありません。教師と子どもの信頼関係に基づいた指導をさします。学級集団作りをする上で基盤となるのが、教師と子どもの信頼関係と、一人一人の自尊感情を高めることでつながっていく、子ども同士の信頼関係です。その基盤があることで、自治的集団としての力を発揮し、協働的問題解決能力を育成することができま

す。つながりのある関係には、安心感があります。そのような関係を築くことができると、子ども達は、周囲の目を気にしたり、失敗を恐れずに、やる気を出すことができるのです。教師は、一人一人の子どもとの人間関係を確立する必要があります。教師が関心をもっていると感じた子どもは、学習意欲が高くなります。午後のワークショップでは、教育的機能の高い学級集団づくりの具体的な方法として、クラス会議を行いました。グループをつくり、コンプリメントと言われる、肯定的な感情を出す練習をし、良い雰囲気をつくります。そして、課題に対して良質の解決策を出すために、たくさんの意見を出します。実際にやってみると、話す回数が増えるので、他者に貢献していると実感することができました。

三日目は、浄智寺住職の朝比奈惠温氏を招いて、鎌倉時代に起こった仏教文化（坐禅）を体験しました。場所は、臨済宗円覚寺派の大本山であり、鎌倉五山第二位の円覚寺です。広い畳の部屋で、呼吸法や座る姿勢を教えて頂きました。また、円覚寺の舎利殿（神奈川県で唯一の国宝建造物）を拝観する貴重な体験もできました。

よりよい学級経営のために、教師がどのような取り組みをすればよいのか、多くのことを学ぶことができました。

## メディア教育部会

### ICTを活用して、気になることをしてみませんか？

横山　治樹（桐光学園）

今年度もたくさんの方に参加いただき、全国の私立小学校のメディア教育への関心の高さを感じました。今年度の研修会のテーマは「ICTを活用して、気になることをしてみませんか？」というテーマでした。

研修会では、各学校で活躍される先生方の実践報告をしていただきました。新渡戸文化小学校の岡田先生や奈良学園小学校の藤野先生の実践報告では、導入された話題のタブレットの授業内での使用方法や直面している課題について赤裸々に話していただきました。すでに導入している先生も、これからの導入を考えている先生も、教員の研鑽と環境整備の大切さを再確認させられる時間となりました。

また、タブレットを児童一人ひとりが所持して、個別の学習に利用するための方法について研究を続けられている、四天王寺小学校の竹内先生からはe-learningについて、これまでの活動報告をしていただきました。児童一人ひとりが自分の力に合わせて苦手なことを学習することができる環境は、着実に児童の学習成果をあげていました。ICTを利用することのよさを再確認した発表でした。

雲雀丘学園小学校の森岡先生からは、西日本地区でのICT導入の苦労について話を伺いました。まだまだ導入する機器が発展途上であるため、何をするにも機器の性能に左右されてしまうのが現状であることを再確認させられました。

二〇二〇年に小学校で必修化される予定のプログラミング教育については、現在いくつかの学校と協力して研究されている株式会社アーテックの鈴木氏にお越しいただき、プログラミング的思考の育て方について話を伺うことができました。導入を

検討するにあたり、参考となるものでした。

ワークショップ型の研修では、株式会社LoiLoからお越しいただいた杉山氏に、話題の「ロイロノート・スクール」の使い方を教えていただき、実際に使わせていただきました。使い方が単純で、すぐに使いこなすことができました。全国の多くの学校で導入されている理由がわかりました。モバイルルーターを持って行ったフィールドワークでは、参加された先生方が訪れた先で発見した面白いものなどを、ロイロノート・スクールを利用して上手にプレゼン資料を作成していました。様々な活動に利用できることを実感する時間でした。

ＩＣＴ機器の導入を検討する学校では、その機器の使い方が話題にあがります。そして、使い方の習熟についても議題にあがることが多いです。扱いやすいことで抵抗が少ない機器や機能、故障や苦労の少ない安定した環境が現場に求められています。本来の教員の仕事から少しずれた内容かもしれませんが、今先生方が必要としている情報なのだと、研修会を考える側として再確認させられる機会となりました。

最後に、多くの先生方のご協力で無事に研修会を実施することができましたことにお礼申し上げます。各方面で熱心に取り組まれている先生方と知り合い、交友が深められたことも研修会の大きな成果でした。

## 学校図書館部会

### 人・学びのかけはしとなる学校図書館を目指して

大澤　育子（武蔵野東）

学校図書館部会は、「人・学びのかけはしとなる学校図書館を目指して」をテーマに研修を行った。第一日目は、『あなたも名探偵』・『わんわん探偵団』・『にゃんにゃん探偵団』・『怪盗ショコラ』シリーズで人気の杉山亮先生に「物語をどう語るか　なぜ語るか」について講演を聞いた。子供たちに物語の面白さを伝えるにはまず語る事が大切である。面白い、もっときたいと思えば本を読むようになる。普段から話をたくさん聞き、主人公に寄り添い、土を耕すように心を動かすことが大切である。その中でも昔話は、日本人の価値観や美意識がとけ込んでいるのでおすすめであると語られた。実際に昔話に発想を得た楽しいお話を語られ、私たちも物語を聞く楽しさを実感した。

二日目の午前は「教育課程と学校図書館―歴史から考える―」という講演を東京学芸大学附属小金井小学校学校司書の中山美由紀先生に伺った。学校図書館は運営上「三つのＣ：コレクション、コミュニケーション、カリキュラム」が重要である。学習目標、方法を知った上で学校カリキュラムに沿った選書を行うのが重要と話された。学校図書館の歴史をたどりながら、現代のアクティブ・ラーニングの視点にも触れ、これからの教育に学校図書館がより積極的に関わるべき時勢になったとまとめられた。

午後は、子どもの本コーディネーターのさわださちこさんにワークショップ

うだ。その作品は「観察絵本」と呼ばれ、細部にいたるまで緻密に書き込まれている。絵本作りの基本は楽しく描くこと。神経をすり減らすように細かく描く一方、遊び心をもって楽しく描いているのが分かった。館内は、クイズ形式で見て回れるようになっていて、親子連れの小学生が楽しそうに過ごしていた。絵本の奥深さや絵本の持つ力を感じることのできたひと時だった。有意義な三日間の研修であった。ここで学んだ事を二学期の図書館運営に生かしていきたいと思った。

として簡単に作れる本を生かす小物づくりを教えていただいた。まず、さわださんのおすすめの本三十冊をそれぞれのテーマや内容に合わせてコーディネートしていった。カフェカーテン、ボンボン、フラッグと二学期に図書館を彩るだろう素敵な飾り物が完成した。

三日目は、神奈川近代文学館において「西村繁男の世界展」を鑑賞した。西村さんは、小さい頃から何かをじっと観察するのが好きだったそ

# 外国語部会

## 私学としての外国語教育の在り方

前川　紀子（さとえ学園）

外国語部会は「私学としての外国語教育の在り方」をテーマとし研修を実施した。第一日目は東京家政大学教授の小泉仁氏をお招きし「本当の言語教育とは？グローバル化する社会における外国語教員の役割」という演題で「日本の英語教育の現状」、「小中高の英語教育の連携の必要性」、「教授法」、「従来の英語教育の常識を疑う」という内容を中心に今後日本が目指すべき英語教育の方向性についてご講演いただいた。

第二日目の午前中は各地区からの研究・実践報告を実施した。東北地区からは会津若松ザベリオ学園小学校のサベッジ順子先生・江川クレア先生に「英語を通して行う他教科の発展学習Science in English -Life Cycle-」についてご発表いただいた。六年生で行う「動物のライフサイクル」の単元の導入からポスターで発表するまとめに至るまでを映像を交えてご発表いただいた。東京地区からは田園調布雙葉小学校の海崎百合子先生より「多読の取り組み」についてご発表いただいた。多読の取り組みや多読開始後の子ども達の反応、多読を実施するねらいについてご発表いただいた。西日本地区からは百合学院小学校のBill Allen先生より三・四年生で十分間英語の授業で読む時間を設けている「Reading Time」についてご発表いただいた。Reading Timeを始めるに至った経緯や

Reading Timeを進めるうえでのルールについて、各フロアに設置されている英語図書室やReading Time実施後の成果についてお話しいただいた。

午後はテーマ別ディスカッションを実施した。『効果的な4技能指導』と題し、「読む」「聞く」「書く」「話す」のグループに分かれ各技能の指導や活動アイディアについて話し合った。日頃使用している教材を示しながら、指導で工夫している点や効果的なアクティビティ、またICT環境を活用して行う授業アイディアなどもご発表いただいた。

第三日目は「子どもが思わず英語を使いたくなるアクティビティ」と題し、東京・関東・九州地区の教員有志によるワークショップを実施した。参加者が生徒役となり、低・中・高学年に応じた活動をご紹介いただいた。英語教育の盛んな私立小学校で日頃から研究を行っている先生方ならではの実践的なアクティビティを多数その背景にある実践理論と共に紹介してくださった。事前に練習させて英語を言えるようにするのではなく、子どもの知的探究心を刺激するミーニングフルなやり取りのなかで、集中したインプットを行い、自然に子どもの発話を促すアクティビティーを多数ご紹介頂いた。子どもの興味を引く工夫が随所に施された活動を生徒役となって体験することができ大変盛り上がった。

二〇二〇年の英語の教科化に向け各校カリキュラムの見直しや指導方法の工夫、研究を進めている中、今回の研修では小学生の時期に大切にすべき指導や学習内容がより明確になり大変興味深い有意義な研修会となった。

## 家庭科部会

### 個人の物語を編んでいく家庭科

土田　純奈（聖心女子学院）

横浜が会場となった今回、一日目は廣田商事営業促進課課長の宮澤高広氏を講師に迎え、「絹の道」をテーマに研修が行われた。横浜開校以来、山梨や群馬から良質な生糸が横浜に運ばれヨーロッパへと渡って行った。日本の高い養蚕技術、そして日本の養蚕は手先の器用な女性の手仕事に支えられていたことなどを知ることができた。「横浜と生糸、絹の道」に人と人が織り成してきた歴史が深く刻まれている事をじっくり考えることのできた時間となった。三日目のフィールドワークは、椎野正兵衛商店の椎野秀聰氏にヨーロッパへ渡った貴重な絹織物を実際に見せていただき、日本のシルクの現状などを伺うことができた。見せていただいた絹織物はどれも素晴らしく、日本の高い技術を目の当たりにすることができた。また馬車道にある老舗洋装店「信濃屋」を訪問し、シルク製品の見学や手作業で製造の様子を見学することができた。

二日目は化学教師から家庭科教師へと転向した小平陽一氏を講師に迎え、人生をデザインするために、家庭科という教科の必要性、重要性を考えることができた。物を作るだけの教科ではなく、自立するための大切な学びとなる教科であることを再認識することができた。

午後の研修では、成蹊小学校の鈴木宏明先生による「エコバッグを作ろう・使おう」というテーマで講義・実習を行った。六年生の報告では、エコバッグの製作、染色するだけにとどまらず、環境に配慮した学習へ

と発展させたり、実際に使用した結果や調べたことをパワーポイントでまとめたりと、学習の幅がたいへん広いものとなっていた。実際に実習することで、自分の手で作り出したものへの愛着を感じ、それを窓口としたコミュニケーションの広がりを体験することとなった。午後二つ目の研修では、四天王寺小学校の高見英子先生より、災害時の備えとして「食と防災」というテーマで、災害時に大切なことは、一人ひとりが取り組む「自助」であることを学ぶことができた。また、管理栄養士である、今泉マユ子氏に災害時に必要な家庭内備蓄の内容や方法について教えていただいた。各家庭に合ったものを備蓄することの大切さ、そして日常的に食べたり、試したりすることがいかに大切かを知り、災害について自分のこととして考える機会となった。最後には実際にポリ袋を使って防災食を実習、試食した。災害はいつ起こるかわからないものだからこそ、普段から備えること、また健康に生き抜くためにも、災害食をおいしくいただくことの大切さを教えていただくことができた。

## 生活・総合部会

### 子どもと作る生活科・総合的な学習

秋本　篤志（鎌倉女子大）

今年度の生活・総合部会の夏季研修会は自然や生き物の命を通しての授業づくりが研修の中心テーマとなりました。

外部からの講師としまして、福井県獣医師会理事・学校飼育動物事業委員会委員長の大門由美子先生と草木染研究所柿生工房の山崎和樹先生をお招きしました。大門先生からは、学校での動物飼育の実践例を紹介していただきました。実体験の少なくなってきている子どもたちに命を考えるきっかけを生活科や総合的な学習の中で作っていくことの大切さを改めて捉えなおすことができたように思います。山崎先生からは、草木染についての講演をしていただいた後に、実際に身近にあるもので作ってきていただいた顔料を使って、スティンシルを体験させていただきました。こちらもまた、これからの授業に活かしていけるようなヒントをいただけたように感じました。

各地区からは、モルモットなどの動物の飼育、アサガオ、野菜などの栽培についての発表がありました。動植物を学校内でどのように飼育・栽培しているのか、カリキュラムにはどのように位置づけられているのか、具体的に子どもたちとどのような学習活動を行っているのかについて発表してくださいました。発表の後には、グループに分かれ各校の実践についての情報交換が活発に行われていました。

また、幼少連携についての情報交換会も鼎談形式で行われました。私立小学校においては、併設校として附属幼稚園があるところも多くあります。それぞれの学校の建学の精神を活かした取り組みについての情報交換を行うことができました。ただ一緒に活動を行うだけではなく、幼稚園と小学校のそれぞれの学習で目指すところをお互いに理解し合い、協同的に学習活動を展開していくことが望まれます。また、そのためには常日頃からの情報交換の場を設けることや教員同士の交流も必要ではないかと言う意見が多く聞かれました。

講演・研修で学んだことを各学校に持ち帰り、学校の中でどのように

活かしていくかが、私たちの研修の本当のスタートではないでしょうか。

# 学校劇部会

## お互いを高めあう表現活動
### ～子どもたちと共に

大澤　勇太（七沢希望の丘）

一日目は、基調提案として、山本茂男先生（森村学園）が、今日の子どもたちを取り巻く環境が変化する中で、「子どもたちと共に」というスタンスの重要性、そして劇活動の汎用性を説き、研修会がスタートした。

まず、坂本道則先生（相模女子）による「ほぐしの活動」を行った。学級開きのような会場の雰囲気が、「自己紹介じゃんけん」から活動が始まり、「ティッシュになりきろう」では笑い声が絶えなくなり、会場に一体感が生まれた。

次に、木越憲輝先生（聖学院）、古屋有子先生（国本）、久保田直子先生（聖徳大付属）の三人による「場面づくり」の実技提案が行われた。一人一人の自由な身体表現を引き出すための活動から始まり、グループでお題に対して静止画＋十秒の動画で表現する活動、最期に場面の一場面をセリフや人との関わりを入れて作っていく活動を紹介した。実践では、さすが教員といったような時事ネタで内容が繋がり、大きな笑いに包まれ、一日目が終了した。

二日目は、河原崇之先生（森村学園）による声を出す活動から始まった。「さんぽ」、「むすんでひらいて」などの誰もが知っている歌に乗せたゲームで、身も心もほぐされた。

次は、川窪章資先生（森村学園）、坂本則道先生（相模女子）による「創作劇につながる実習」を行った。新しい人間関係を構築するための発想に富んだグループ分けの後、心と体をほぐしながら、少しずつ課題をレベルアップしていきながら、コミュニケーションの中で劇を創りあげていくことを体感し、参加者が適度な緊張感と達成感を持って午前中を終えた。

午後は、新保えみ先生（湘南白百合）によるリズムにのって体を動かすゲームで始まった。頭と体を使いながら、最後のチームに分かれたボディーパーカッションでは、リズムが重なり合い、一つになった達成感を味わうことができた。

頭も体もほぐれた後は、山本茂男先生（森村学園）による、「児童と教師との共同創作劇」について実践報告を行った。最初に実践報告があり、次に劇作りを参加者で体験、最後に実際の劇を鑑賞するという三部構成であった。山本先生の一人ひとりを認め、子どもたちの主体性を引き出すための「待つ姿勢」や工夫によって、いきいきした子どもたちの姿を手に取るように感じることができた。

三日目は、神奈川県内の国指定重要無形民俗文化財である相模人形芝居を継承されている長谷座の座長山口熱子先生に実技講習を行った。相模人形芝居の概要を説明された後、特徴である三人遣いを体験し、三というもの日本古来の調和と、美しいしぐさを実感することができた。この後に、地域の伝統文化である相模人形芝居を活かした劇発表の実践を私から報告した。

この三日間で、参加者それぞれが「子どもと共に」という姿勢を体感し、考える機会となった。

## 平成 28 年度　第 40 回

# 全国教頭研修会

**期日**　平成28年８月7日(日)～8日(月)

**会場**　ホテル河鹿荘　他

## 教師の専門的力量を問う

精華小学校　大野達夫

今回の研修会は、従来おこなっていた新横浜を離れ、全国的な観光地である箱根を研修場所に選びました。参加者五十八名は、八月七日(日)の昼過ぎ、小田原駅前に集合し、バス二台に分乗して研修に向かいました。

研修一日目の内容は、蒲鉾の「鈴廣」での蒲鉾作り体験と、「本間寄木工房」での寄木細工コースター作り体験でした。二つのグループに分かれて、交代でそれぞれの体験をしました。この二つの体験は、横浜英和小学校の児童が、地場産業の体験学習として取り入れているコースで、地元の伝統的な産業や工芸品を直接肌で感じることのできる、格好の学習コースではないかと思われました。

一日目の研修を修了して、宿泊場所の旅館「河鹿荘」で、夕食を兼ねた懇親会が開

かれました。懇親会では、研修参加者の紹介がおこなわれ、各地区や学校が抱えている問題などが話されました。英語学習への取り組み、道徳の教科化についてや、プログラミング学習などが話題に挙がりました。

今回の泊まりは和風旅館でしたので、三～四人で一部屋に泊まりました。各部屋とも、それぞれ違う地区の人が同部屋になるように人数割りをしましたので、懇親会で話しきれなかったことも、部屋で続きを話し合うなど、例年とは違った雰囲気になりました（ちょっと西熱海ホテルを思い出しました）。

二日目の研修は、同旅館において講演をおこないました。慶應義塾大学教職課程センター教授の佐久間亜紀先生をお招きし、「教師の専門的力量とはなにか―日米比較の観点から」をテーマにお話を伺いました。

『日米の教師を比較してみると、その大きな違いが分かります。アメリカの公立小学校教員の場合、仕事は授業に特化されています。逆に、授業以外のことは教員がやる必要がないということです。日本の公立小学校教員の場合は、授業以外の仕事量が莫大であるということです。

もっとも、待遇面では日本の教員は夏休みであっても給料が支払われる、アメリカではバカンス中の給料は支払われないなど、日本では社会的な地位も含めて優遇はされているということです。

そういう中で、教師の専門性には、日本流の専門職としての特性があるのではないか。それを求めるには、目の前の児童の様々な行動に対して、立ち止まって振り返る、いわゆる「省察」が重要になってきます。現場で今何が問題になっているのか、この学校の課題は何なのかなど、問題を認識する力が求められています。

私立学校は、それぞれの学校の伝統と自主性を発信して、創造的な営みを作り出していくことが大切だと思われます。』

要約すれば、以上のような内容の講演を伺い、私立小学校の教員としての使命感を新たにしました。

こうして二日間の研修を終え、小田原駅前で解散しました。

# 2010 年代の教育宣言

今や、地球規模で激動する 2010 年代を迎えました。私たち私立小学校は、著しい社会変化と科学技術の高度化が進展する時代の中で、建学の精神を継承するとともに伝統を重んじ、その使命とする理想の教育をめざし、誇りをもって初等教育の先駆的な実践を世に問うてきました。

21 世紀は「知識基盤社会」の時代であるといわれています。その一方で「心」の時代でもあります。私たち私立小学校は、個人の自由と人権および児童一人一人の個性を尊び、その内なる可能性を児童愛をもって引き出す方法を実践・探究し、未来を切り拓いていく基礎的資質と心豊かな人間性を育成します。

併せて、真の世界平和と持続可能な自然環境の維持のために、広い視野をもって考え、共感する力を身につけた児童を育成します。

そのため、私たち私立小学校は、伝統と特色ある教育をさらに充実させ、私学人としての自覚に立ち、お互いに協力結束し磨き合い、わが国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2010（平成 22）年 6 月 11 日

日本私立小学校連合会